

聖書：創世記 9：18～29

説教題：ほむべきかな、セムの神、主

日時：2023年5月14日（朝拝）

6章から見て来たノアの洪水物語の最後にもう一つのエピソードが今日の箇所です。何と正しい人として洪水のさばきをくぐり抜けたノアが、新しくされた世界でぶどう酒を飲んで酔い、裸になったという出来事です。ノアは農夫となり、ぶどう畑を作り始めました。そのぶどうからできたぶどう酒を彼は飲みました。そのこと自体は問題ではありません。聖書でぶどう酒は悪とは言われていません。たとえば詩篇 104 篇 15 節で、神が人間に与えてくださった賜物が数え上げられ、そこに「ぶどう酒は人の心を喜ばせ」と出て来ます。また民数記 15 章には主へのささげもの、芳ばしい香りとしてぶどう酒のことが述べられています。

その一方、聖書は酒に酔うことについては一貫して否定的な態度を取ります。たとえば箴言 21 章 17 節に「快樂を愛する者は貧しい人となり、ぶどう酒や油を愛する者は富むことがない」とあります。また新約聖書でもコリント人への手紙第一 5 章 11 節に「兄弟と呼ばれる者で、淫らな者、貪欲な者、偶像を拜む者、人をそしめる者、酒におぼれる者、奪い取る者がいたなら、そのような者とは付き合っはいけない、一緒に食事をしてはいけない」とあります。同じコリント書 6 章 9 節にも神の国を相続することができない人のリストに「酒におぼれる者」が入っています。またガラテヤ人への手紙 5 章の肉の行いのリストにも、お酒と関係するものとして「泥酔、遊興」が出て来ます。そしてエペソ人への手紙 5 章 18 節でははっきりとこのように禁じられています。「また、ぶどう酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。むしろ、御霊に満たされなさい。」ある人は、聖書はお酒を飲むことそれ自体は禁じていないという点を強調して、だからお酒は良いのだ、気にせず飲んで良いのだという態度を取ります。しかしそうしていても簡単に聖書が禁じる一線を越えてしまい、そのことについては色々と言いつつ、自分勝手に自分を許容しているということはないでしょうか。聖書に明示されている神の御心を踏み越えているにもかかわらずです。

このノアの姿も創世記の読者にショックを与える記事として記されています。せつなく洪水をくぐり抜けたノアが新しい世界で神の御心に反する姿をさらけ出しています。一言で言って罪の姿です。そして彼は酔っただけではありませんでした。彼

はその結果、天幕で裸になりました。これは明らかにお酒とセットでしばしば現れる品位のない姿、愚かしい姿、恥ずべき姿として私たちの前に提示されています。神は大洪水によってこの世界をきよめられたのに、生き残ったノアがさっそくこのような姿を示すようでは、この先の世界にどんな希望を持てるでしょう。ここまで読んで来た者が残念に思わずにいられない姿がここにあるわけです。

この事件を前にして、その子どもたちはどうしたかということが今日のメインポイントです。18 節に「箱舟から出て来たノアの息子たちは、セム、ハム、ヤフェテであった」とあります。また 19 節にあるように「この三人がノアの息子たちで、彼らから全世界の民が分かれ出」ました。この世界はこの後、この三人から増え広がるわけですから、この三人がそれぞれどういう人であるかが今後の世界の成り行きに大きく関わることとなります。

まず最初に記されているのはハムです。22 節：「カナン之父ハムは、父の裸を見て、外にいた二人の兄弟に告げた。」 24 節で彼のことが「末の息子」と言われていますからハムは一番下の弟だったのでしょう。彼は天幕に入った時、父の恥ずべき姿を見ました。それが目に入ったこと自体は問題ありません。しかしここでの「見る」という言葉は強い意味の言葉です。つまり彼はじっくり見たのです。父のあられもない姿を興味津々の目で、悪い心で見たのです。普通父は無防備に自分の体を裸でさらすことはしません。ですからハムもそんな姿は見たこともなかったと思います。そのあつてはならない姿が目飛び込んで来た時、急いで目を背けても良かったのに、ハムは逆にじっくり見たのです。この際、見てやろうと思って見た。彼は内心喜んでこれを目に焼き付けたのです。それだけではありませんでした。彼は次に外にいた二人の兄弟にそのことを告げました。お父さんがこんな姿をさらけ出しているよ！と。表面的には「大変だ！」という振りを装っていたかもしれませんが、心ではこの特ダネを誰かに伝えずにいられない。皆に広めずにいられない。ハムはこうして天幕の中でそつとノアの体を覆ってあげれば済んだ話をわざわざ他の人に伝えました。天幕の中というプライベートな場所で行われた罪を公に言い広めました。そのことによって父の不名誉が大きくなるように、父が一層傷つくようにと振る舞ったのです。

この末の息子と対照的だったのは残りの二人の兄たち、セムとヤフェテの対応です。彼らはハムからこれを伝え聞いて、え～！そうなの？じゃ、もっと他の人にも言わな

くちゃ！と、さらにどこかへ走って行くことをしませんでした。彼らは直ちに逆方向へ動き出しました。彼らは上着を取り、父の恥ずべき姿を覆おうとしました。その彼らは「うしろ向きに歩いて行った」とあります。これでは歩きにくいですし、敏速に行動できないはずなのに、なぜそうしたのかと言えば、それは 23 節最後に書いてあるように父の裸を見ないためです。末の弟の「見ろ！」「見ろ！」という誘惑に抵抗して、その姿を目に焼き付けないようにしたのです。父の残念な姿を知って心を痛めつつ、本人の名誉を思って行動したのです。果たしてどちらが愛によって行動した人たちでしょうか。思い起こされるのはペテロの手紙第一 4 章 8 節：「愛は多くの罪をおおうからです。」 誰かの罪を見た場合、私たちはどうするのでしょうか。他の人にそれを言いふらすのでしょうか。それで一層その人の不名誉を上げようとするのでしょうか。それともこの二人の兄たちのように、それをおおう働きをするのでしょうか。この対照的な兄弟たちの行動を通して、私たちが自分はどう行動するのが正しいのか、どうすることが神の御心にかなうことなのか、聖書の勧めに合致することなのか考えさせられたいと思います。そしてふさわしい振る舞いを導かれたいと思います。

さて今日の箇所後半には酔いから覚めて事の次第を知ったノアの言葉が記されています。これは聖書に記されているノアの唯一の言葉です。まず彼はこう言いました。25 節：「彼は言った、『カナンはのろわれよ。兄たちの、しもべのしもべとなるように。』」まずここで思うことはカナンとは誰かということです。カナンはハムの子でした。18 節と 22 節で前もってそのことは繰り返し述べられていました。ではなぜ罪を犯したのはハムなのに、その子カナンが呪われているのでしょうか。色々なことが言われます。ある人は 9 章 1 節で神はノアとその息子たちを祝福したと言われていたから、その一人であるハムに呪いの言葉を語ることはできず、その息子の名が使われたのではないかと。またハムは末の息子でしたが、カナンはハムの息子たちの中の末の息子だったことが次回見る 10 章 6 節から分かります。ここから末の息子ハムへの呪いが、同じく彼の末の息子のカナンに行ったのではないかと言う人もいます。またノアはここでカナンを名指ししていますが、ということはカナンはすでに洪水後の世界で生まれており、ノアはそのカナンの内に今回のハムに見られた罪が強く現れているのを見て、こう述べたのではないかなどとも言われます。確かにそういう面はあったのかもしれませんが。親の悪がその子にも見られ、しかも末の息子の罪が、さらにその末の息子に見られたということがあったのかもしれませんが。しかしこれは人間の思いを超える預言的な言葉と見るのが良いのではないのでしょうか。この後の歴史を知る人は、そのこ

とを思わずにいられません。やがて神の民イスラエルはカナンの地に入っていきます。これはカナン人の積もりに積もった罪に対するさばきの使いとしてです。そのカナン人はまさに今日の箇所の中の罪の延長線上にあるような人々で、不道徳で特徴づけられる人々でした。そのカナンは「兄たちの、しもべのしもべとなるように！」とされています。「しもべのしもべとなる」とは、服従する者となるということを強調した言い方と考えられます。これは後にカナンがイスラエルに征服され、イスラエルが勝利することを預言するものと言えます。ノアの息子たちの子孫はそのような将来をたどることが、いわゆる託宣として、預言としてこのように語られたと考えられます。

次はセムについてです。26節：「また言った。「ほむべきかな、セムの神、主。カナンは彼らのしもべとなるように。」 このセムと次のヤフェテを比べて分かることはセムの方がより祝福されているということです。おそらく二人の内、セムがノアの罪をおおうためのリーダーシップを取ったのでしょう。しかし注目すべきはここでセムがほめたたえられているのではなく、セムの神、主をノアはほめたたえているということです。確かに称賛すべき行動を取ったのはセムです。しかしだからと言って人間に栄光が帰されるのではなく、良きことのすべては神に帰すべき！という聖書の信仰がここに現れています。栄光はただ神にのみ！ということです。しかしそれ以上の意味がここにあると考えられます。ここに「セムの神、主」と言われています。主なる神が「セムの神」と言われています。ここに意味されていることは何でしょうか。それは創世記3章15節で与えられた神の救いの約束は、このセムを通して実現されて行くということではないのでしょうか。神は創世記3章15節で、罪を犯したアダムとエバに、やがて女から出る一人の子孫を通して救いを与えるという最初の福音、いわゆる原始福音を与えてくださいました。その約束はアダムからセツに受け継がれ、エノシュに受け継がれ、エノクに受け継がれ、ノアに受け継がれて来たことを見て来ました。この神の約束は今後、セムを通して実現して行くということです。言い換えれば神はセムをお選びになった。神はご自身をセムの神として現されたということです。洪水後の世界にも罪の出来事が起こりました。ノア自身も罪を犯し、末の子ハムも一層の罪を犯しました。そんな中、セムはこのように行動しました。ノアはここに神が救いの約束に真実であられること、罪の力に打ち勝つ恵みをこのように現していること、そして今後このセムを通して救いの約束を確かなものとして実現して行ってくださることを見たのです。それでその「セムの神、主」に目を上げて賛美したのです。

このセムの家系から、この後見るようにアブラハムが生まれ出ることとなります。このセムの流れ、神の民に対して、やがてカナンはそのしもべとなるように！とされています。

最後三つ目はヤフェテです。27 節に「神がヤフェテを広げ、彼がセムの天幕に住むようになれ。カナンは彼らのしもべとなるように」とあります。次の 10 章でノアの子孫の諸氏族のリストを見ますが、ヤフェテの子孫は今日のトルコやギリシャ、ヨーロッパに大きく広がる民となります。そのヤフェテの子孫はセムの天幕に住むようにとされています。これはヤフェテの子孫が選ばれた神の民、セムの子孫と平和の関係、祝福の関係に生きようになるということを述べたものと思われる。これは具体的にどういうことでしょうか。私たちが思わずにいられないのは新約時代、パウロの世界伝道はまさに小アジア（トルコ）、そしてヨーロッパ、ギリシャの町々に行われたということです。そこに多くの異邦人教会が誕生し、神の民の祝福に組み込まれるようになります。確かにその子孫はセムの天幕に住むようになるのです。そのような将来までを預言するものとなっていると見ることはできないのでしょうか。最後にノアは大洪水の後、350 年生き、全生涯は 950 年であったことが記され、まとめられています。

今日の箇所私たちが見るのは洪水後の世界もまた悪が現れる世界であったということです。ノアが罪を犯し、その息子もさらなる罪を犯しています。それだけを見るとガッカリしそうになります。しかしそんな世界にもなお希望があることを今日の箇所は示しています。その希望は「セムの神、主」から来ます。セムとヤフェテの行動はたまたまの行動ではなく、ノアが認めたように、そこには神の恵みの御手が現れています。創世記 3 章 15 節の約束に基づいて、救いをもたらそうとする神の真実が現れていると見ることはできます。神はセムを選んで、罪に打ち勝つ働きを進めています。その神の恵みはその後、セムの子孫であるアブラハムに現れます。その恵みはさらにどこに現れるでしょうか。それはイエス・キリストの誕生とその働きにおいてです。人の心に思い届くことは相変わらず悪に傾き、世界は罪に染まる中、その罪に打ち勝つ恵み、より頼む者を救う神のみわざがついにはっきり現れることに至るので、ノアは正しい人と言われましたが、彼が救い主なのではありません。彼もまた私たちと同じ罪人の一人でした。私たちの望みはただ神の恵みに、その現れであるイエス・キリストにこそあります。私たちも罪が多いこの世にあって、最も正しい人でも

残念な姿を示すこの世にあって、この世界を見捨てず、ご自身の約束に基づいて救いのわざを進めてくださる神に希望を置き、より頼む者でありたいと思います。そしてその約束に基づいてついに現れた救い主イエス・キリストにより頼んで、罪から救われ、罪の力に打ち勝つ勝利の歩みを導かれたいと思います。そしてそのような歩みができる時には、ノアのように主こそをほめたたえ、主に一切の栄光を帰す神の民の歩みを導かれたいと思います。